

後藤 由季子 博士

東京大学 大学院薬学系研究科 教授

『若い研究者に向けて』

武田医学賞という大変名誉な賞をいただきました。よく研究は山登りに喩えられますが、私の場合、まだ三合目といった気持ちでいます。それでもその道のご評価いただいたことに感謝の念が絶えません。

これまで受賞された先生方の文章を拝読して、いずれも私が今読んでも勉強になることばかりでした。その中でも共感したのが河岡義裕先生の「不安と才能」です。河岡先生ほどの方でも若い頃は不安だったのか、と妙に安心しました。私は特に自信がなく自己否定してばかりいる若者でしたので、不確実性の高い「研究」という世界でよく曲がりなりにも生き残ったものだなあと今更ながら思います。私の周りには、自信がないがために研究でも人生でも、次の一歩がなかなか踏み出せない若者がたくさんいます。彼らに私はよく、「君たち優秀なんだから、空自信でよいから、出来ると自分に言い聞かせてやってみたら」と言ってきました。しかし自信を持ちたくても持てなくて

困っているわけですから、自信がないのが当たり前、と思えたらむしろ腹が括れるかもしれないですね。

私は初めから研究を志していたわけではありません。元はといえば、将来文系職に就く際に理系のバックグラウンドを持つていたら独自性が出せるのではという不純な気持ちで、理学部生物化学科に進学しました。そして実験を始めたらあまりに面白くてハマってしまい、今に至ります。特に面白かったのは、自分で仮説をA, B, Cと立てて、それを区別できる実験を行えば、Bが正解、という風に結果が得られるというプロセスです。そして、「自分の手でBを解明した」という喜びが病みつきになりました。このプロセスを重ねれば自分の興味ある課題について真理が解明できるのだと思い、自信はないけれども出来るところまで研究をやってみようと修士課程のときに決めました。また、博士課程三年生のときに初めて海外学会にポスターを出したのですが、そこでひとつ印象的な出来事がありました。ポスターをみてくださった方から、「あなたの出したEur J Biochem論文のFigure xxについて、実はこういう解釈なのではないですか?」とコメントされたのです。



それまで私は、自分の興味で積み上げた実験結果（論文）というものは発表したら終わりどこかで思っていたのです。しかし実際は、世界の遠くでちゃんと読まれていて、同じ問題について深く考えている人たちがいるのだということ、研究は地球全体で繋がっている共同作業なのだということに気づいて感動しました。また、自分で研究しつつ、世界中から発表される論文を読むうちに、研究という山には高い低いがあるのももちろんですが、美しい山や、同じ山でも美しい登り方があることも学びました。自分の実験結果をシェアする喜びだけでなく、他の人の研究にも「こんな視点があったとはー」と感動できるとは、研究者とはなんて素晴らしい職業なのだろう、と大学院生のときから今に至るまで思っています。

研究者として最も嬉しかったことが何かを振り返ると、大事な仲間達と目標に向かって一緒に戦った熱い時間のように思います。日本の片隅から最高のサイエンスを世界に示すのだ、という気持ちで団結していました。その奇跡のような時間が持てたことを、それぞれの時代の仲間達に心から感謝しています。私が学生るとき、恩師の西田栄介先生が（まさにこの寄稿文でも書かれておられるように）学生を自立した研究者として扱ってくださって、自由に研究をさせてくださいました。これに勝る教育はなく、西田先生のこの教育方針がなければ私は研究者になっただけでなかったと思いますし、この上なく感謝しています。しかしいざ自分が研究室主宰者になって同じことが出来るかというと非常に難しいもので、この二〇数年全く思うようにはならなかったです。そういう中でも結局胆力のあるメンバーがそれぞれの力で成果を築き上げてくれて、それに私が乗った格好で今のラボがあるように思います。西田流の教えが染み込んでいるのもあり、それぞれのメンバーの「自由」「個性」を大切にしよう意識していて、おかげで私のラボは変わった人の多い「動物園」と評されることもありました。そして私はそのことを誇りにしていました。若いみなさんが、（角を矯めるでなく）自分の個性を伸ばして目一杯人生を楽しんでくれたら、そして個性あふれる場を作って活躍してくれたら、と願っています。